

THE SONG OF SOLOMON
AND
LAMENTATIONS.

耶穌降生千八百八十七年

米國聖書會

舊約
聖書
耶利米哀歌
雅歌

明治二十年

日本橫濱印行

02-K1

海老澤文庫

雅歌

第一章

接吻をもて我にくちつけせんことなり、
 汝の愛の酒よりもまさり
 ぬ。三 なんぢの香膏の其香味たへに馨しく、
 なんぢの名のろよぶれ
 たる香膏のごとし、是をもて女子等
 なんぢを愛す。四 われを引たま
 へ、われら汝にまたぶひて走らん、
 王われをたづさへて、
 ろの後宮にいきたまへり、
 我らの汝によりて歡てび樂し、
 酒よりも勝りて、
 なんぢの愛をはめたよふ、
 彼らの直きころをもて、
 汝を愛す。五 エ
 ルサレムの女子等よ、
 わ色の黒けれども、
 なほ美はし、
 ケダルの天幕
 のごとく、
 またツロモンの帷帳に似たり、
 われ色くるさ、
 故に日
 のわ色を焼たるが故に、
 我を視るあゝ、
 わ母の子等、
 わ色を怒り
 て我に葡萄園をまもらまめたり、
 我のあのが葡萄園をまもらざり
 きせわぶ心の愛する者よ、
 なんぢの何處にて、
 なんぢの群を牧さひ、

雅歌 第一章 自一至七節



午時いづこにて之を息まするや請ふわれに告よ、なんふ面を覆へ
る者の如くしてなんぢの伴侶の群のかたえらにをるべけんや○
ハ婦人の最も美はしき者よ、なんぢ若えらすべ群の足跡にまたぶ
ひて出ゆき、牧羊者の天幕のうたはらにて汝の羔山羊を牧へ○九わ
が佳耦よ、我あんちをバロの車の馬に譬ふ+あんちの臉に鍵索
を垂れ、あんちの頭に珠玉を陳ねて至も美はしきわをら白銀の
星をつけたる黄金の鍵索をなんぢのために造らん○十二王其席に
つきたまふ時、わぶナルダ其香味をいだせり十三わが愛する者ハ我
にとりてわが胸のあひだにかきたる没薬の袋のごとし十四わが愛
する者ハわをにとりてハエンゲテの園にあるコベルの英華のご
とし○十五あふ美えしきあな、わぶ佳耦よ、あふうるはしきかな、なん
ちの目の鳩のごとし○十六わぶ愛する者よ、あふなんぢの美えしく
また樂しきかな、われらの牀ハ青緑なり十七わぶ色らの家の棟樑ハ香

柏、ろの垂木は松の木あり

第一章

にわぶ佳耦のあるハ荆棘の中に百合花のあり○二女子等の中
愛する者の男子等の中にあるハ林の樹の中に林檎のあるごとし
し、我わぶかく喜てびてろの蔭にすわをり、ろの實ハわぶ口に甘あり
き四彼をれをたづさへて酒宴の室にいきたまへり、ろの我上にひ
るがへしたる旗ハ愛なりき五請ふ、なんぢら乾葡萄をもてわが力
をさぎなへ林檎をもて我に力をつけよ、我ハ愛によりて疾わづら
ふ六かきぶ左の手ハわが頭の下にあり、ろの右の手をもて我を抱
く七エルサレムの子等よ、我なんぢらに獐と野の鹿とをさし誓
ひて請ふ、愛のれのづから起るときまでハ殊更に喚起し且つ醒す
なかせ○八わぶ愛する者の聲きこゆ、視よ、山をとび、岡を躍りて
て來たる九わが愛する者ハ獐のごとし、また小鹿のごとし、視よ彼

われらの壁のうしろに立ち、窓より覗き、格子より窺ふ。われを愛する者、われに語りて言ふ、わが佳耦よ、わが美はしき者よ、起ていできたれ。視よ、冬すでに過ぎ、雨もやまてはやさりぬ。十二もろくの地にあり、れ、鳥のさへづる時すでに至り、班鳩の聲、わがらの地にきてゆ。十三、無花果樹の青き果を赤らめ、葡萄の樹の花さきてうの馨はしき香氣をはきつ、わが佳耦よ、わが美しき者よ、起て出きたき。十四、磐間にをり、斷崖の匿處にをるわが鳩よ、われにみんちの面を見させよ、なんちの聲をきかえめよ、なんちの聲を愛らしく、なんちの面はうるはし。十五、われらのために狐をどらへよ、彼の葡萄園を愛する者は我につき、我のかれにつく、彼の百合花の中にてうの群を牧ふ。十七、わが愛する者よ、日の涼しくあるまで、影の消るまで身をかへして出ゆき、荒き山々の上にありて、獐のごとく、小鹿のごとく

せよ

第三章

一夜わを床にありて、我心の愛する者をたづねし。尋ねた色ども得ず。我おもへらく、今あきて邑をまわりありき、わが心の愛する者を街衢あるひの大路にてたづねんと、乃ちあをを尋ねたれども得ざりき。三、邑をまとりありく夜巡者らわれに遇ければ、汝らわが心の愛する者を見しやと問ひ、四、ふれに別れて過ゆき間もなくわが心の愛する者に遇たをバ之をひきとめて放さず、遂にわが母の家にともなひゆき、我を産し者の室にいりぬ。五、エルサレムの子女子等よ、我なんぢらに、獐と野の鹿とをさし誓ひて請ふ、愛のわがづから起る時まで、殊更に喚起し且つ醒すなかき。六、この没薬乳香あせ商人のもろくの薫物をもて身をかをらせ、煙の柱のごとくして、荒野より來る者の誰ぞや。七、視よ、このソロモンの乘輿にして、勇士六十八の周圍にあり、イサラエルの勇士なり。八、まな

刀劍を執り、戰鬥を善す、各人腰に刀劍を帶て夜の警誠に備ふルソ
 ロモン王レバノンの木をもて己のため、に輿をつくれリ、
 は白銀、うの欄杆の黄金、うの座の紫色にて作り、うの内
 部に、イ
 ラエルの女子等が愛をもて繕たる物を張つく、
 シオン
 の女子等
 よ、出きたりて、ソ
 ロモン王を見よ、かれの婚姻の日、心の喜こべる日
 に、ろの母の己にかうぶらまし冠冕を戴だけり
第四章 - あふなんち美はしきかな、わが佳耦よ、あふなんちうるは
 しきかな、あふなんちの目、面帕のうしろにありて、
 鴿のごとし、なんち
 の髪、ギレアデ山の腰に臥たる山羊の群に似たり、
 二なんちの齒
 の毛を剪たる牝羊の浴場より出たるがごとし、
 あのく、
 雙子をう
 みて、ひとつも子なきものはあし、
 三なんちの唇、
 紅色の線維のご
 とく、
 うの口の美はし、
 なんちの頬、
 面帕のうしろにありて、
 柘榴の
 半片に似たり、
 四なんちの頸、
 武器庫にとて建たるダビデの戌

樓のごとし、
 うの上、
 一千の盾を懸つらぬ、
 みな勇士の大楯なり
 五なんちの兩乳房、
 牝犢の雙子なる二箇の小鹿、
 百合花の中に
 草は、
 三をるに似たり、
 六日の涼しくなるまで、
 影の消るまで、
 わを没
 薬の山、
 七また乳香の岡、
 八行べし、
 七わが佳耦よ、
 なんちのごとし、
 く
 うるは、
 八しくして、
 九すこしのさすもなし、
 〇八新婦よ、
 レバノンより我
 にともなへ、
 レバノンより我ととも
 に来よ、
 アマナの巔、
 セニルまた
 ヘルモンの巔より望ま、
 獅子の穴、
 九また豹の山より望め、
 九わが妹、
 わ
 新婦よ、
 なんちのわが心を奪へり、
 なんちの只、
 一目をもて、
 二また頸
 玉の、
 一をもて、
 三わが心を奪へり、
 十わが妹、
 わが新婦よ、
 なんちの愛
 の樂しき、
 一な、
 二なんちの愛、
 三酒より、
 四も遙にすぐれ、
 五あふなんちの香膏の
 馨、
 六一切の香物より、
 七もすぐをたり、
 八新婦よ、
 九なんちの唇、
 蜜を滴
 らす、
 一あふなんちの舌の底には、
 二蜜と乳とあり、
 三あふなんちの衣裳の香氣、
 四レ
 バノンの香氣のおどし、
 五わが妹、
 六わがはなよめよ、
 七なんちの閉たる

園その閉とたる水源みなもと封ふうじたる泉水いづみのおとし十三なんぢの園そのの中に生おひいづ
 る者ものの石榴ざくろおよび及もろくの佳果よきみまたコペルおと及びナルダナルの草くさ
 ナルダナル、番紅花ばんこう、菖蒲あやぶ、桂枝けいしさまの乳香にゅうかうの木きおよび及没薬ぼつやく、藍蒼らんそう一切いっ
 の貴たどき香物かうぶつなり十五なんぢの園そのの泉水いづみ、活いる水みづの井い、レバノンレバノンより
 いづる流水ながれなり○十六北風きたかぜよ起おこき、南風みなかぜよ來きたれ、わが園そのを吹ふてるの香か
 氣きを揚あげよ、ねおはくわが愛あいする者ものの園そのにいりきたりてる
 の佳よき果みを食くらへんことを
 一 わが妹いもわがはなよめよ、我われの園そのにいり、わが没薬ぼつやくと薰かきり
 物ものとを採とり、わが蜜房みつばと蜜みつとを食くらひ、わが酒さけとわが乳ちとを飲のみ、わが
 伴侶ばんり等たちよ、請こふ食くらへ、わが愛あいする人ひと々々よ、請こふ飲のみあけよ○十七われわれの睡ねむ
 りたををもわが心こころの醒さめたり、時ときにわが愛あいする者ものの聲こゑあり即すなはち
 門かどをたゞささていふ、わが妹いもわが佳耦よきむすめ、わが鴿はと、わが完またきものよ、わ色の
 ために開ひらけ、わが首かみに露つゆ満みち、わが髪かみの毛けの夜よの點あみたりと

三 わをすすでわが衣服ころもを脱ぬぎ、いかでまた着きるべき、已すでにわが足あしを
 あらへり、いかでまた汚けがすべき、わが愛あいする者ものの穴あなより手てをさ
 しいれしかばわが心こころかよのためためにうごきたり五やがて起おいで
 わが愛あいする者ものの爲ために開ひらるんとせしとき没薬ぼつやくわが手てより没薬ぼつやくの汁じ
 わが指ゆびよりなををて關木くわんの把柄てりてのうへおまたささり六我われわが愛あい
 する者ものの爲ために開ひらきしわが愛あいする者ものの已すでに退あり去さぬ、さきに
 物ものいひし時ときわが心こころさわぎたり、我われかれをたづねたれども遇あはず、呼よ
 たれども答こたへなかりき七邑まちをよとりあり八夜巡よすま者もの等らわ色いろを見み
 てうちて傷きずつけ、石垣いしがきをまもる者ものらわが上う衣はをはぎと色いろり九
 ルサレムルサレムの女子むすめ等らよ、我われなんぢらにかたく請こふもしわが愛あいする者もの
 にあこと汝なんぢら何なにとこ色いろにつぐべきや、我われ愛あいによりて疾あわづらふと
 告つげよ○十なんぢの愛あいする者ものの別わかれの人ひとの愛あいする者ものに何なにの勝まされると
 ころありや、婦女むすめの中うちのいと美うきはしき者ものよ、なんぢが愛あいする者ものの別わか

の人の愛する者に何の勝るるところありて斯わきらに固く請ふ
 や○+わが愛する者の白くかつ紅にして萬人の上に越ゆさうの
 頭の純金のごとく、うの髪いふさやかにして黒きこと鳥のごとし
 十三うの目の谷川の水のはどりにをる鶴のごとく、乳にて洗はを
 て美はしく嵌り十三うの頬の馨しき花の床のごとく、香草の壇の
 ごとし、うの唇の百合花のごとくにして没薬の汁をまたらす十四
 うの手いき心をたる碧玉を嵌し黄金の鋼のごとく、うの脛の
 をもてかほひたる象牙の雕刻物のごとし十五うの脛の蠟石の柱を
 黄金の臺にたてゑるぶごとく、うの相貌のレバノンのごとく、うの
 優をたるさまの香柏のごとし十六うの口はあはだ甘く誠に彼に
 の一つだにうつくしからぬ所あり、エルサレムの女子等よ、こぞ
 見よ愛する者、こぞうの伴侶ある
 婦人のいと美はしきものよ、汝の愛する者の何處へゆは

しや、なんちの愛する者のいづこへおもひたしや、わきら汝とも
 にたづねん○=うの愛するもの己の園にくんだり、香しき花の床
 にゆた、園の中に群を牧ひ、また百合花を採る三我のうの愛する
 者につき、うの愛する者のうの色につく、彼は百合花の中にてうの群
 を牧ふ○四うの佳耦よ、なんちの美はしきことテルザのごとく、華
 やかあることエルサレムのごとく畏るべきこと旗をあげたる軍
 旅のごとし五なんちの目の我をおろしむ、請ふ我よりはなをし
 めよ、なんちの髪にギレアデ山の腰に臥たる山羊の群に似たり六
 なんちの齒の毛を剪たる牝羊の浴場より出たるぶごとしおのお
 の雙子をうまてひまつも子なれものいなし七あんなちの頬の面帕
 の後にありて石榴の半片に似たり八后六十人妃嬪八十人、數えら
 れぬ處女あり九わが鶴わが完死者のたゞ一人のみ、彼のうの母の
 獨子にして産たる者の喜ぶとあるの者なり、女子等の彼を見て幸

福なる者せとなへ、后等妃嬪等の彼を見て讚む。この晨光のごせ
 くに見へわたり、月のごせ、空くに美はしく、日のごせ、くに輝や、
 長るべ、死のごせ、旗をあげたる軍旅のごせ、死者の誰や、○
 われ、胡桃の園にく、だり、ゆた谷の青死草木を見、葡萄や芽し、
 石榴の花や咲し、と見、回しをりしに、注意のす、知す我の心、
 わせを、忘てわが、貴を、死民の車、の中間に、あらしむ、
 ○
 歸を、歸れ、シユラミの婦よ、歸を、歸を、
 われら、汝を、觀ん、ごせ、空を、ね、
 ぐ、ふ、○
 なんち、ら、何、を、マ、ハ、
 ナ、イ、ム、の、跳、舞を、觀る、ごせ、
 空、に、シ、ユ、ラ、ミ、の、婦を、觀ん、
 空、を、ね、
 ぐ、ふ、や、
 第 七 章
 一 君の女よ、なんちの足、の鞋、
 の、中、に、あ、り、て、如、何、に、美、は、
 し、死、か、な、汝、の、腰、の、ま、ろ、ら、
 り、に、し、て、玉、の、ご、と、く、巧、
 匠、の、手、に、て、作、り、た、る、
 ご、ご、と、し、
 二、なんちの臍、の美酒、
 の、飲、る、ご、と、あ、ら、
 ぎ、る、圓、き、杯、盤、の、ご、
 と、く、なんちの腹、は、積、
 か、さ、ね、た、る、麥、の、ま、
 り、を、百、合、花、も、て、
 る、ご、と、め、る、ご、如、し、
 三、なんちの兩、
 乳房、は、牝、鹿、の、雙、
 子、あ、る、二、の、小、
 鹿、の、ご、と、し、

四、なんちの頸、の象牙、
 の、戍、樓、の、如、く、汝、の、目、
 の、ヘ、シ、ポ、ン、に、て、バ、
 テ、ラ、ビ、ム、の、門、の、ほ、
 と、り、に、あ、る、池、の、ご、
 と、く、なんちの鼻、
 の、ダ、マ、ス、コ、に、對、
 へ、る、レ、バ、ノ、ン、の、
 戍、樓、の、ご、と、し、
 五、なんちの頭、
 の、カ、ル、メ、ル、の、ご、
 と、く、なんちの頭、
 の、髪、の、紫、色、の、ご、
 と、し、王、の、垂、
 た、る、髪、に、つ、な、
 ぶ、れ、た、り、
 *、あ、と、愛、よ、も、
 ろ、く、の、快、樂、の、中、
 に、あ、り、て、なんち、
 の、身、の、長、の、棕、
 欄、の、樹、に、等、
 く、如、何、に、悅、む、し、
 き、者、な、る、あ、な、
 七、あ、ん、ち、の、身、
 の、長、の、棕、欄、の、
 樹、に、等、しく、なんち、
 の、乳、房、の、葡萄、
 の、ふ、さ、の、ご、と、
 し、ハ、わ、れ、謂、ふ、
 る、の、棕、欄、の、樹、
 に、の、ぼ、り、う、の、
 枝、に、執、つ、か、ん、
 と、なんちの乳、
 房、は、葡萄、の、ふ、
 さ、の、ご、と、く、あ、
 ん、ち、の、口、の、美、
 ど、く、あ、ん、ち、の、
 鼻、の、氣、息、の、林、
 檜、の、ご、と、く、
 旬、は、ん、九、あ、ん、
 ち、の、口、の、美、酒、
 の、ご、と、し、わ、
 が、愛、す、る、者、の、
 た、め、に、滑、か、に、
 流、れ、く、だ、り、
 睡、れ、る、者、の、口、
 を、し、て、動、り、し、
 む、○、
 +、わ、れ、の、わ、
 が、愛、す、る、者、に、
 つ、き、彼、の、わ、れ、
 を、戀、ま、た、ふ、
 十、わ、が、愛、す、
 る、者、よ、わ、れ、
 ら、田、舎、に、く、
 だ、り、村、里、に、
 宿、ら、ん、
 十一、わ、
 色、ら、夙、に、お、
 きて、葡萄、や、芽、
 し、
 十二、蒼、や、い、
 で、し、石、榴、の、
 花、や、さ、さ、し、
 い、ざ、

葡萄園にゆきて見ん、かしまにて我わぶ愛をかんぢにあたへん
 戀茄かぐはしき香氣を發ちもろくの佳き果物古き新らしき共
 にわぶ戸の上にあり、わぶ愛する者よ我これになんぢのためにな
 くそへたり

一ねぶさくの汝わぶ母の乳をのみしわが兄弟のごとくな
 らんことを、われ戶外にてなんぢに遇ふとき接吻せん、然するとも
 誰ありてわれをいやしむるものあらじ
 二われ汝をひきてわぶ母
 の家にいたり汝より教誨をうけん、我かぐをしき酒石榴のあまき
 汁をなんぢに飲まめん
 三かきぶ左の手わが頭の下にあり、う
 右の手をもて我を抱く
 四ニルサレム
 の女子等よ、我なんぢ等に誓
 ひて請ふ愛のかのづから起る時まで殊更に喚起し且つ醒すなり
 れ
 五かのれの愛する者に倚かよりて荒野より上りきたる者の
 誰ぞや
 六林檎の樹の下にてわれなんぢを喚さませり、なんぢの母

あしこにて汝のためは働勞をかし、なんぢを産し者かしこにて働
 勞をなしぬ
 七われを汝の心におきて印のごとくし、なんぢの腕
 にあきて印のごとくせよ、其の愛の強くして死のごとく、嫉妬の堅
 くして陰府にひとし、うの燐の火のはのはのごとし、いとものはげし
 き燐ありて愛の大水も消ことあたはず、洪水も溺らすことあたはず、
 人ろの家の一切の物をことごとく與へて愛に換んとするとも
 尙いやしめらるべし
 八われら小さき妹子あり、未だ乳房あらず、
 われらの妹子の間聘をうくる日に之に何をあしてあたへんや
 九かれもし石垣ならんに我ら白銀の城をうの上にてたてん、彼も
 し戸ならんに香柏の板をもてこれを圍まん
 十われの石垣わ
 ぶ乳房の戌樓のごとし是をもてわれの情をかうひせる者のごと
 く彼の目の前にありき
 十一パールハモンにソロモン葡萄園をもて
 り、これをろの守る者等にあづけあき、彼等をしてかの銀一千

をろの果のため納めしむ十二わき自らの有なる葡萄園わきの手にありソロモン十三かんぢは一千を獲よ、ろの果をまもる者も二百を獲べし、十三なんぢ園の中に住む者よ、伴侶等なんぢの聲に耳をかたむく、請ふ我十四にこれを聴十四えめよ、十四苗わぶ愛する者よ、請ふ急ぎはしき、香はしき山々の上十四ありて、獐のごとく、小鹿のごとくあれ

雅歌 終

耶利米亞哀歌

第一章

あゝ哀しいかな古昔之人のまぢまぢたりし此都邑いよの凄しき様にて坐し、寡婦のごとくにあり、嗟もろくの民の中にいて大いなりし者もろくの州の中に女王たりし者いまいかへつて貢をいりし者となりぬ、彼よもすがら痛く泣きかゝし、二涙面にながる、ろの戀人の中にはこれを慰むる者ひとりだに無く、ろの朋にこれに背きてろの仇となれり、三ユダは艱難の故によりまた大いなる苦役のゆゑによりて擄われゆき、もろくの國に住ひて安息を得ず、四色を追ふものみな狹隘にてこれに追しきぬ、四シオンの道路は節會上り來る者なきがために哀しみ、ろの門はことごとく荒き、ろの祭司の歎き、ろの處女五憂へ、シオンもまた自ら苦しむ、五ろの仇の首となり、ろの敵の亭ゆ、ろの愆の多きによりてエホバこれをやませたまへるなり、ろのわかき子等六擄

れて仇の前あだまへにゆけりハシオンの女むすめよりはろの榮華さかえことくく離はな
 れされり、またろの牧伯きかた等の草くさを得たざる鹿しかのごとくに成なり、おのれ
 を追おふもの前まへに力ちからつかせて歩あゆみゆけりセエルサレムの難なや
 と窘迫くろしめの時ときむるしの代よにありしもろくの樂たのしき物ものを思おもひ出い
 づ、うの民仇たかあだの手てにおちいり、誰たれもこれを助たすくるものあき時とき仇人あだびとこ
 を見みてろの荒あはれてたるを笑わらふハエルサレムはなはだしく罪つみ
 ををかしたきバ汚穢けがねたる者もののごとくあきり、前まへにこれを尊たよとひた
 る者ものもろの裸體はだかを見みしによりて皆みなこれをいやしむ、是こゝもまたみづ
 から嗟なげき、身みをろむけて退ちりけり、ろの汚穢けがねこそお裾すそにあり、彼かれろ
 の終局さいりをおもはざりき、此故このゆゑに驚おどろくまでに零落おちたり、一人ひとりの慰なぐさ
 むる者ものだに無なし、エホバよわが艱難なやみをかへりみたまへ、敵てきの勝かちはこ
 色いろり+敵てきすでに手てを伸のべてろの財室たからをことく奪うひたり、汝なんぢさき
 に異邦人いこくにびと等らの公會こうかいにいるべからずと命めいじおきたまひし

に彼らかれらの聖所せいじよに侵をかしいるをシオンは見みたり、ろの民たみごまな哀あはき
 て食物くひものをもどめ、ろの生いのち命めいを支さへんがために財寶たからを出いして食あにか
 へたり、エホバよ見みろなれし我われのいやしめらるるを顧かへりたまへ
 ますべて行路みち人びとよ、なんぢら何なにともおもえざるか、エホバろの烈はげし
 き震怒いかりの日ひに我われをなやましてわれに降くだしたまへるこの憂うれ苦ねにひ
 どしき憂うれ苦ねまた世よにあるべきや考かんふへ見みよエホバ上うへより火ひを
 くだし、わが骨ほねにいきて之これを克かち服くせしめ、綱あみを張はりわが足あしをとらへ
 て我われを後うしろにむかえめ、我われをえて終日ひねり心こころさびしく、かつ疾やみわづらえ
 めたまふエホバわが愆とが尤がの軛くびきの主しゆの御手みでにて結むすばれ諸もろの愆とがあひ纏まとえ
 りてわが項くびにのれり、是こゝにわが力ちからをえておとろへあむ、主しゆわれを敵あだ
 たりぶたき者ものの手てにわたしたまへり、主しゆわが中うちなる勇士ゆうしをこ
 とごとく除のぞき、節會せちあひをもよほして我われを攻せめ、わが少わかき人ひとを打う得とるば
 したまへり、主しゆ酒權さかづかをふむぶおとくユダの處女ととめをふまたまへり

夫みれむために我なげく、わが目やわが目に水なぐる、わがた
 しひを活すべき慰さむるものわれに遠けれをなり、わが子等の敵
 の勝るによりて滅びうせにきしオンの手をのぶ色をも誰もふ
 色を慰さむる者あし、ヤコブにつきてはエホバ命をくだしてろの
 周囲の民をこれが敵とあらまめたまふ、エルサレムに彼らの中に
 ありて汚れたる者のごとくなりぬ、エホバを正し、我らの命令に
 ろむきたるなり、一切の民よわれに聴け、わが憂苦をうへりまよ、わ
 が處女もわかき男も俘囚て往りたわ色わが戀人を呼たまも彼
 らわれを欺むけり、わが祭司およびわが長老の生命を繋ぎんと
 て食物を求むる間に都邑の中に氣息たわたり、エホバよかへ
 りみたまへ、我のなやみてをり、わが腸わさかへり、わが心わが裏に
 顛倒す、われ甚だしく惇りたまなり、外に之劍ありてわが子を
 殺し、内に死のごとき者あり、三かきらわが嗟歎をさけり、我を

なぐさむるもの一人だに無し、わが敵をかわる難をさよあよび、
 汝のこれを爲たまひしを喜こべり、汝のさきに告まらせし日の
 を來らせたまへん、而して彼らもつひに我ごときお成るべし、三
 むのくわ彼等が與へし艱難をことごとくあんなの御前にあら
 し、前にわがもろくの罪愆のためには我におふなひし如く彼らに
 も行なひたまへ、わが嗟嘆を多く、わが心はうきひかあしむあり
第三章 一 あはエホバ震怒をおふし、黒雲をもてシオンの女を蔽ひ
 たまひ、イスラエルの榮光を天より地におとし、ろの震怒の日にお
 の色の足凳を心にどめたまざりき、主ヤコブのすべての住居を
 呑つくして恤れまらず、震怒によりてユダの女の保壁を毀ち、色を
 地にたふし、ろの國どろの牧伯等を辱かしめ、烈しき震怒をもて
 イスラエルのすべての角を絶ち、敵の前にて己の右の手をひきち
 ぢめ、四面を焚きつくす燃る火のごとくヤコブを焚き、四敵のごと

く弓を張り、仇のごとく右の手を挺て立ち、凡て目に喜こをしまも
 のを滅ぼし、シオンの女の幕屋に火のごとくろの怒をろごぎたま
 へり、主敵のごとくに成たまひてイセラエルを呑はろぼし、ろの
 諸の殿を呑はろぼし、ろのもろくの保砦をこぼち、エダの女の上
 に憂愁と悲哀を増くさへ、園のごとく己の幕屋を荒し、ろの集會
 の所をはろぼしたまへり、エホバ節會と安息日とをシオンに忘を
 しめ、烈しき怒によりて王と祭司とをいやしめ棄たまへり、七主
 の祭壇を忌棄て、ろの聖所を嫌ひ憎て、ろの諸の殿の石垣を敵の
 手にわたしたまへり、彼ら之節會の日のごとくエホバの室にて聲
 をたつ、エホバシオンの女の石垣を毀たんと思ひさだめ、繩を張
 り、こぼち進みてろの手をひかず、壕と石垣とを去て哀しまめた
 まふ、是ら共に憂ふ、ろの門の地に埋もれ、エホバの關木をこ
 ぼちくだき、ろの王ともろくの牧伯の律法なき國人の中にあり、

ろの預言者のエホバより異象を蒙らず、シオンの女の長老等
 地に坐りて黙し、首に灰をかむり、身に麻をまどふ、エルサレム
 女の首を地に低る、わが目の涙のために潰れんとし、わが腸の沸
 かへり、わが肝の地に塗る、わが民の女はろぼされ、幼少ものや哺乳
 兒の疲ればて、邑の街衢に氣息たへ、かんとすさばなり、母の懷
 の疵、負る者のごとく、邑のちまたにて氣息たへ、なんとし、母の懷
 にろの靈魂をろごぶんとし、母にひかひて言ふ、穀物と酒といづ
 くああるやと、エルサレムの女よ、我かにをもて汝ああかし、何
 をもて汝あならべんや、シオンの處女よ、われ何をもて汝になら
 へて汝をなぐさめんや、汝のやぶれの海のごとく、大なり、嗟たれか
 能くなんちを醫さんや、なんちの預言者の虚しき事と愚なるこ
 と、なんちに預言し、ろつて汝の不義をあらせしてろの俘囚をま
 ぬかき、えめんとし、せざりき、ろの預言するところの惟ひなしき重

荷および追放たるゝ根本とあるべき事のみ十五すべて往來の人あ
んぢにむかひて手を拍ち、エルサレムの女にむゐひて、嘲りわらひ、
のつ頭をふりて言ふ、美麗の極、全地の欣喜とぞなへたりし邑は是
なるかどまなんぢのもろくの敵のなんぢお對ひて口を開け、あ
さけり笑ひて切齒をなす、斯て言ふわれら之を呑つくしたり、是わ
れらガ望みたりし日なり、われら已に之にあへり、我らすでに之を
見たりとエホバの定めたまへることを成し、いおしへより
其命じたまひし言を果したまへり、エホバはろばして憐れます、
敵をして汝あちほこらしめ、汝の仇の角をたかくしたまへり、
かきらの心の主おむかひて呼をせり、シオンの女の墻垣よ、なんぢ
夜も晝も河のほとく涙をなげせ、みづから安んずることをせず、汝
の瞳子を休むることなかれ、なんぢ夜の初更に起いで呼さけ
べ、主の御前に汝の心を水のごとく灌げ、街衢のはどりに饑たふる

よあんなちの幼児の生命のため主にむかひて兩手をあげよ、
ホバよ視たまへ、汝これを誰におこなひしか願はくは願みたまへ、
婦人おの實なるの懐き育てし孩兒を食ふべけんや、祭司、預言
者等主の聖所において殺さるべけんや、三をさなきも老たるも街
衢にて地に臥し、わが處女も若き男も刃にかゝりて斃れたり、なん
ぢのろの震怒の日にこれを殺し、これを屠りて恤をみたまはさり
き、三あんなち節會の日のごとくわが懼るゝところの者を四方より
呼あつめたまへり、エホバの震怒の日に、遁れたる者なく又のこ
りたる者なりき、わが懐き育てし者みなわが敵のためにはろ
ばさきたり

第三章 一 我のうれの震怒の答によりて艱難お遭たる人なり、二か
色の我をひきて黒暗をあゆませ、光明にゆるしめたまはらず、三まこ
とに屢々うの手をむけて終日われを攻あやまし、四わが肉と肌膚

をちどろへまめ、わが骨を摧き、われにむかひて患苦と艱難を築き、これをもて我を圍み、われをして長久に死し者のおどく暗き處に住しめ、我をかこみて出るもど能ひさらしめ、わが鎖索を重くしたまへり、我さけびて助をもとめしとき、彼わが祈禱をふせぎ、砍ある石をもてわが道を塞ぎ、わが途をまげたまへり、十の我に對するごとく、伏て伺ふ熊のごとく、潛みかくるゝ獅子のごとし、わ色に路を離れ、我をひきささきて獨くるし、まゑめ、弓を張てわれを矢先の的となし、矢筒の矢をもてわが腰を射ぬきたまへり、われのわがすべの民のあざけりとなり、終日うたひろしらる、われをてて苦き物に飽しめ、茵蔯を飲まめ、小石をもてわが齒を摧き、灰をもて我を蒙ひ、まへり、なんぢわが靈魂をてて平和を遠く、なれまめ、たまへ、わが氣力うせゆきぬ、エホバより何を是にかいて我みづから言ひ、わが氣力うせゆきぬ、エホバより何を

も望むべきところ無しと、ねがはく、我の艱難と苦楚、茵蔯と膽汁とを心に記さへ、わがたましひの今なは是らの事を想ひて、わが衷に鬱々、われこの事を心おおもひ起せり、この故に望をいだくなり、われらの尙ほろびざるの、エホバの仁愛により、憐憫の盡ざるに因る、これ之朝ごとに新あり、なんぢの誠實の、おほいなるかな、わが靈魂の言ふ、エホバのわが分なり、このゆゑに我彼を待ち望まん、エホバのわが分なり、このゆゑに我もどむる人に恩恵をはせ、したまふ、エホバの救拯をのみて、静にこれのを待て、善し、人わうき時に、輒を負ひ、善し、エホバこれを負せたまふ、なほ、獨坐して、黙すべし、口を塵につけよ、あるひ之望、あらん、おのれを撃つ者に、頬をむけ、充足るまで、に恥辱をうけよ、主の永久に棄ることを、爲たまひ、ざるべければなり、の色の患難を與へたまふといへども、ろの慈悲、はいなほ、また

憐憫を加へたまふなり 三三 心より世の人をぢやまし、うつ苦しめたまふに、いあらざるなり 三四 世のもろくの俘囚人を脚の下にふみにじり 三五 至高者の面の前にて人の理を枉げ 三六 人の詞訟を屈むること、この主のよろこびたまえざるどころあり 三七 主の命じたまふにあらずば、誰か事を述べんに、ろの事すなはち成んや 三八 禍も福もともに至高者の口より出るにあらずや 三九 活る人なんぞ怨言べけんや、人れのれの罪の罪せらるゝをつぶやくべけんや 四〇 我等みづうらの行をしらべ、かつ省みてエホバに歸るべし 四一 われら天にいます神にむゐひて、手ととも心に、心をも舉べし 四二 われらの罪をかじ、我らの叛きたり、なんぢの色を赦したまひさりき 四三 なんぢ震怒をもてみづゐら蔽ひ、我らを追ひせめ、殺してあわれませぬ 四四 雲をもてみづから蔽ひ、祈禱をして通ぜざらめ 四五 もろくの民の中にわれらを塵埃となしたまへり 四六 敵の皆わきらにむかひて、口を張り、畏

懼と陥阱また暴行と滅亡 我らに來をり 四八 わが民の女の滅亡によりて、わが眼に、涙の河なぶる 四九 わが目と斷ず、涙をろゝぎて止す 五十 天よりエホバの臨み見て、顧みたまふ時に、まで至らん 五一 わが邑の一切の女等の故によりて、わが眼のわが心をいたましむ 五二 故なくして、我に敵する者ども、鳥を追ひ、とくにくにいたく、我をおひ 五三 わが生命を坑の中にぼろぼし、わが上に石を投げかけ 五四 また水わが頭の上に溢る、我みづから言ひ、滅びうせぬと 五五 エホバよ、われ深き坑の底より、汝の名を呼び、あんち我の聲を聴たまへり、わが哀歎と祈求に、耳をおひ、たまふなかれ 五七 わが汝を顧たりし時、なんぢの近より、たまひて、恐るゝなかれと、宣へり 五八 主よ、あんちわが靈魂の訴を助け、伸べ、わが生命を贖ひたまへり 五九 エホバよ、なんぢの我のからむりたる不義を見たまへり、願くは、我に正しき審判を與へたまへ 六〇 なんぢの彼らに、我を怨み、われを害せんとせざるを、凡て

見たまへり、エホバよなんぢを害せんと
 之かるを凡て聞たまへり、我を害せんと
 びろの終日われを攻んとて運らす謀計もまた汝これを知りて聞たまへ
 り、さねおとく、彼らの起居をかんとみたまへ、我のさきに歌ひ
 ろしらるるエホバよ、なんぢの彼らに爲すところ、に循るひて
 報をなし、かれらをして心くからせめたまへ、おんぢの呪詛
 かれらに歸せよ、なんぢの震怒をもてかきらを遣ひ、エホバの天
 の下よりかきらをほろぼし絶たまはん
第四章 - あゝ黄金の光をうしなひ純金の色を變じ、聖所の石も
 ろく、の街衢の口に投すてられたり、あゝ精金にも比ぶべき
 オンの愛子等の陶器師の手の作なる土の器のごとくに見做る、
 山犬さへも乳房をたれてろの子に乳を哺す、然るおわが民の女の
 殘忍荒野の蛇鳥のごとくなれり、乳哺兒の舌の濁さて上脣にひ

たと貼き、幼兒のパンをもとむるも擧てあたふる者なし、肥甘物
 をくらひ居し者、あちぶれて街衢にあり、紅の衣服にて育てられ
 し者も、今の塵堆を抱く、いま我民の女のうくる愆の罰、ソドム
 の罪の罰よりもおほいなり、ソドムの古昔人に手を加へらるゝと
 どなくして瞬く間に得ろぼされしなり、セウの民の中、ある貴き人
 は従前に雪よりも皎潔に、乳よりも白く、珊瑚よりも鮮紅色にし
 て、ろの形貌のうるはしき、いと藍玉のごとくなりし、おほいなる
 の面くろき、ダ上に黒く、街衢にあるとも人にあられず、ろの皮の骨
 にひたと貼き、乾きて枯木のごとくなれり、たて死する者、
 死する者よりもさいはひなり、ろの斯る者、田圃の産物の醫るによ
 りて、漸々におとろへゆき、刺せし者のごとくに成り、わが民
 の女のほろふる時に、情愛ふかき婦女等、さへも手づから己の子
 等を煮て食となせり、エホバの憤恨をこしく、洩し、烈しき

怒をうらぎたまひ、シオンに火をもやししてその基礎までも焼しめ
 たまへり、土地の諸王も世のもろもろの民もすべてエルサレムの
 門に仇や敵の打いらんどの信ぜざりき、斯ありしその預言者
 の罪により、その祭司の愆によきり、彼らに即ち正しき者の血を
 ろの邑の中になおしたりき、昔今かれらに盲人のごとく街衢にさ
 まよひ、身は血にて汚色をれば、人々の衣服にふるゝわたえず、人
 かれらにむかひて呼べり言ふ、去よ穢らさし、去れ、去れ、觸るなかき
 と、彼らさしり去て流離バ異邦人の中間にても人々また言ふ、彼ら
 の此に寓るべからずと、エホバ怒れる面をもて、こき色を散しぬま
 へり、再びこれを顧りみたまひし、人々祭司の面をも尊とせず、長老
 をもあわれませりき、せわれらに頼まれぬ救援を望みて目つかき
 おどろふ、我らの俟ぬたりしを救拯をあすこと能はざる國人を待
 をりぬ、敵われらの脚をうかぶへば、我らのおのれの街衢をも歩

くことあたはず、我らの終ちかづけり、我らの日つきたり、即ち我ら
 の終きたりぬ、われらを追ふもの、天空ゆく驚よりも迅し、山に
 て我らを追ひ、野に伏てわきらを伺ふ、かの我ら鼻の氣息た
 る者、エホバに膏ろよぶれたるもの、陷阱にて執へらき、是の
 われらに異邦にありてもこの蔭に住んども、ひとりたりし者なり、三
 ウズの地に住むエドムの女よ、悦び樂しめ、汝にもまゑつひに杯め
 ぐりゆるん、なんちも酔て裸になるべし、シオンの女よ、なんちが
 愆の罰をいせり、重ねてなんちを擄へゆきたまひし、エドムの女
 よ、なんちの愆を罰したまへん、汝の罪を露にし、たまたま
 耶利米亞哀歌 第五章
 一 エホバよ、我らにありし所の事を、おもひたまへ、我らの恥
 辱をかへり、と觀たまへ、われらの産業は、外國人に歸し、われらの
 家屋の他、國人の有となれり、わきらひの孤子となりて、父あらず、わ
 色らの母は寡婦にひとし、われらは金を出して、自己の水を飲み、

おのれの薪を得るにも價をせらふ五われらを追ふ者われらの頸
 に迫る、我らの疲きて休むことを得ず六食物を得て饑を凌七おん
 てエシブー人およびアッスリア人に手を與へたり七わ色らの父の
 罪ををかして已に世にわらず、我ららの罪を負ふなり八奴僕等わ
 れらを制するに誰ありて我らを之九の手よりすくひ出すものおし
九荒野の刀兵の故によりて我ら死を冒して食物を得十饑餓の烈
 しき熱氣によりてわれらの皮膚之爐のおどく熱し十一シオンにて
 婦女等をかされ、ユダの邑々にて處女等けおさる十二侯伯たる者も
 敵の手にて用さき、老たる者の面も尊十三とべれず十三少き者石磨を
 擔はせられ、童子は薪を負てよろめき十四長老の門にあつまること
 を止め、少き者はろの音樂を廢せり十五われら心の快樂はずでに
 罷十六と、わ色らの跳舞をかひりて悲哀十六とあり十六わ色らの冠冕の首よ
 り落たり、われら罪ををかしたれば十七祿なるかな十七これのため我

らの心うきへ、これらのために我ら一の目くらくな一色り一シオンの
 山之荒二えて、山犬の上を歩くなり二エホバよ、なんぢは永遠に在
 す、おんぢの御位は世々かぎりなし三何とて我らを永く忘三せ、われ
 らを斯四ひさしく棄四おきたまふや四エホバよ、ねおはく四の我らをし
 て汝に歸五らえめたまへ、われら歸るべし、我らの日を新五にして昔日
 の目のごとくならえめたまへ、三六さりとも汝六まつたく我ら六を棄た
 まひしや痛七くわれらを怒り七ゐたまふや

